

# 外国語教育における主体的・対話的で 深い学びの視点からの授業改善 —個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を踏まえて—

直山木綿子 (NAOYAMA Yuko)

文部科学省初等中等教育局視学官・鳴門教育大学客員教授

令和5年度 鳴門教育大学 小学校英語教育センターシンポジウム  
「言語活動を通して資質・能力を育成する小学校外国語教育の授業の在り方について考える  
—ICTの効果的な活用を通して—」  
令和5年10月14日(土)

今ご紹介をいただいた直山木綿子と申します。今から90分ほどお時間をいただいて、この演題でお話を差し上げようと思っています。

この演題でお話をする前に、今日お二人の実践をお聞きしてのこと、そしてこのシンポジウムの演題についてのことをお話します。まず、青山先生と岩切先生のととても具体的なお話をみんなでお聞きしました。オンラインでつながっていらっしゃる皆さんもそれを一緒に聞かれました。どう思われましたか。

つまりね、このICTの活用というのは、“具体”なんです。具体、どこでどうやって使うのか、ということに勝るものはないの。私は、今日のお二人の話をお伺いして、そのことを改めて強く思いました。青山先生は、今年度、学習者用デジタル教科書の研究に着手してまだ数ヶ月です。何もわからなかったけどやってみた。使ってみる中でご本人も使えるようになってきたし、子どもも使えるようになってきた。つまり、ICT機器類なんていうのは、いろいろ言っているよりも使ってみないと力が付かない。やってみてはじめて使う力が付く、使えば使うほど力が付くということを実践からお話をされていました。岩切先生のお話は、外国語科の授業の話から入って、その中で一人一人の子どもを取り残さないためにICT機器類を使ったということが終始一貫ご発表の中に盛り込まれていました。ICT機器類をどんな場面で使うのかということです。

私は、今日、自身が話をする役割は何だろう、何の話をすればよいのかと考えながらお聞きしていたのですが、お二人の話が学習指導要領でどのように記載されているかという一般化をするのが私の役割だと思った次第です。それが行政の役割だと改めて思いました。一般化するということは、皆さんが、「附属小学校だからできることだ。あれだけの機器類があるし……。子どもがピッと真っすぐ手を挙げてた。指が反ってたわ。あんな子たちだからできるんだわ」「岩切先生、外国語の指導に長けてるからできるんだわ」という言い訳ができないように一般化します。それが行政の役割です。誰もがやってください。基本である学習指導要領に立ち戻ってやってください。そういったことを今日お二人の実践と指導要領を結び付けてお話をします。これが1点目。

2点目。改めてこのタイトルを読みました。私が思うのは、「ICTの効果的な活用を通して」は、口で言ったって駄目なのです。さっき言ったとおり、参加者がここに一人一台端末を持って、講演なり研修を行うことが「ICTの効果的な活用を通して」なんだと思う。今回のシンポジウムは、オンラインと参集型のハイブリットです。これからはこの方法です。対面だけとか、オンラインだけじゃない。参加者が自分の目的と状況に合わせて選択できるような幅をつくることが求められます。それを鳴門教育大学小学校英語教育センターでやってくださって、おかげで170名のご参加です。オンラインの方は、会場には来られないけどオンラインだったら参加しようとなったわけです。愛知東邦大学からは、ゼミの学生さんが20名参加してくださっているそうです。そんなに大勢の学生をここまで連れて来られない。だからハイブリット型です。次にやらなければいけないのは、「ICTの活用を通して」ということです。参加者がICTを活用して研修なり講演を受けて、ジャムボードを開きながら自分たちで書いて、あるいはスライドに書いて、そして話をする者がファシリテーターになって、みんなのものを掲示しながら、またみんなに送信しながら研修を深めていくことが大切だと思った次第です。来年度は、そんなシンポジウムになるかな。

さて本題に入ります。スライドの資料を見てもらったらわかるように、学習指導要領や文部科学省の資料、中教審の資料で全て埋め尽くされています。あるいは、全国学調の資料で埋め尽くされていますので、この資料は皆さんがこの後も、それぞれの場でご活用いただいても何の問題もありません。

学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」、これがどんなに書かれているかという、資料、1ページ左上にあります。ここに、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」というのが総則に記されているわけです。それにあたっては、「第1の3の(1)から(3)までに示すこと」と書いてあります。これは何のことかという、子どもに身に付けさせたい資質能力の3つの柱のことです。この3つの柱を滞りなく、どれもバランスよく子どもに身に付けさせるということです。その下にたくさん書かれています。赤字の部分だけ意識してご覧ください。「児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら」とあります。今日、岩切先生が「見方・考え方を働かせ」ということを、ご発表の中でおっしゃっていました。この主体的・対話的で深い学びには、実は「見方・考え方」が深く関連しています。しかし、このことを語るだけで90分かかるので、申し訳ないけど今日はお話しません。

「知識を相互に関連付ける」とは、つまり今までに学んだ知識を関連付けるということです。個別の知識を結び付けて大きな概念にするということです。関連付けて深く理解する。関連付けるためには思考も働かさねばならない。情報を精査して考えを形成していく。形成しながら問題を見い出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造、クリエイトしたりすることに向かう過程、実はこの過程を重視しているというところが大事なんです。つまり「長いスパンで子どもの学びを見ましょう」ということです。ファーストフードじゃないということです。

学習指導要領の各教科等ではどう記されているかを見てください。小学校の国語では、さっき言った主体的・対話的で深い学びがあって、1時間じゃなくて長いスパンで勝負するということです。内容や時間のまとまりを見通して、少なくとも1単元で子どもを育ててい

こう、学期で育てていこう、年間で育てていこうということです。中学校の国語にも同じことがそのまま記されています。お手元の資料でいくと1枚目の右上、小学校だけを記していますが、中学校も同じです。これは算数です。数学についても同じことが記されています。外国語活動、外国語科ではどうでしょう。小学校でも中学校についても同じことが記されています。どの教科においても「1時間ではなくて1単元で勝負ですよ」ということを指導要領から丁寧に読み取って欲しいと思います。

その次です。「主体的・対話的で深い学び」って何かという話です。ちょっと時間を置くので、「主体的」ってどんな子どもの姿か想像してみてください。ご自分で考えてみてください。

お聞きします。子どものどんな姿を見たら、「主体的に授業に参加してるな」と思いますか。

参加者「自分が目指している主体的な学びの姿とは、子どもたちが自分で何ができるようになりたいかを考えて、そのためにどうすればいいか、学び方を考えて、振り返って、またチャレンジしようという姿です。」

子ども自身が、何ができるようにしたいかという願いをもって、目標をもって、そしてどうしたらそうなれるかなと自分で考えて、やってみて、それをまた振り返って、もう一度チャレンジしていく。今、出てきたお話の中に「自分から」とか「自分で」という言葉がありました。じゃあ「対話的」な学びってどんな姿を想像されますか。これは小学校の先生に聞いてよいですか。

参加者「対話的な学びは、子ども同士のグループワークだったり、子どもと先生との関わりもそうですけど、一緒に話をしながら学習していくことだと思います。」

「一緒に」というキーワードが出ましたね。子ども同士、先生と子ども、自分以外に誰かがいるということです。自分以外の相手というのは、友達と先生だけですか。教室の中を思い出してみてください。オンラインの方も考えてね。

参加者「ICTを活用して、遠隔の人とか、専門家の人とか、そういった様々な人とつながることができるかと思います。」

教室外に出て行って、それをつないでくれるICTで教室外の人とも結び付けられるということが確かにありますね。じゃあ、人だけですか。そうですね。教材・教科書とも子どもは対話をしています。そして、実は自分との対話もしています。文部科学省の資料では、このように出てきます。お手元の2ページ目、左上がスライドと同じ資料になります。子どもが自ら動くためには、自分の立ち位置を知っていないと、次にどのステップに行ったらよいか分かりませんよね。

例えば、岩切先生は、さっきは優しくそうな顔でしゃべっていたけど、実は飲んだくれで連日連夜飲んでばかりで肝臓が苦しいとします。肝臓がモヤモヤして気持ち悪いのでお医

者さんに行っただとします。そうしたらお医者さんが「どんな生活してるの」と尋ねます。「毎晩飲んでます」「原因はそれやね。ちょっと血液検査してみようか」、その結果「今日から1週間はちょっとアルコールを断って、このお薬を飲んでみようね」と処方してくれる。診断をするということは、彼の今の立ち位置を専門家が見ているということです。そうしたら岩切先生は、僕は今こういう状態だから何をしたら健康な状態に戻れるかという次のステップが見えたわけでしょう。だからそのステップに向かって頑張るわけです。

子どもが次の一步を踏み出すためには、今の自分の立ち位置をメタ認知できないといけない。だけど自分の身体の見えないから、お医者さんという専門家の意見をいただくのです。レントゲンを撮ったり、MRIを撮ったりするでしょう。自分の現状がわかって、「ああ、ここが危ないから、ここを直せばパーフェクト」というように、子どもが主体的に動くためには、自分をメタ認知できる力が要ということです。ちょっと話が逸れるけど、私は自分をメタ認知するためには言葉が必要だと思っています。メタ認知というのは、一步自分を離れて見ることであり、子どもがメタ認知できるためには、言葉の力が重要だと思っています。

今日、学長さまが、最初に「小学校英語研究センターは、もう役割を終えたんじゃないかと実は思っていた」と私の目の前でおっしゃいました。ところが、昨年度のシンポジウムでちょっと考えが変わったとおっしゃってくださいました。小学校の外国語教育という視点だけで見ないで、そこから小学校の教育全体を見直すことができるんじゃないかと思ったから、この小学校英語研究センターの意義はもっと深掘りしていかないとけないし、期待されるものがあるとおっしゃってくださいました。私はとても嬉しかった。まさにその通りで、私は、外国語教育を通して子どもに言葉の力、母語の力を付けたいと思っています。外国語教育を通じて母語の力も強くし、外国語の力も付けていくということ、昨年度シンポジウムでお話したのを覚えています。今日はそのお話は繰り返しません。言葉の力を付けるってとても大事だと思っています。『言語は思考を盛る器』と言われています。言葉の力があって初めて、こういうことができるとということです。

さて、文部科学省が作っている資料の中に書かれていることは、みんなその通りだと思うでしょう。だけど、その具体についてはどこで見ますか。私は、4月に行われた「全国学力学習状況調査」の「質問紙調査」という意識調査に見ようと思いました。国語、算数・数学、そして中学校は英語、この3教科の調査があったんだけど、それ以外に質問紙調査というのがあったんですね。その中に、「主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善に関する取組状況」というカテゴリーの質問があるんです。児童用と生徒用、こちらの左が児童、右が中学生用です。お手元の資料2ページ目の右上です。今3つ書いてあります。ちょっと読んでみてください。それぞれの問題の中で「これは主体的・対話的で深い学びのキーワードではないかな」という部分に印を付けてもらっていいですか。その次の問題は文章が短いです。お手元の資料でいくと、2ページの左下、また3問あります。その次は、子どもではなくて教師対象、学校対象の分です。やはり3つあります。まだまだ続きますよ。お手元の資料でいくと3ページ目の左上になります。あと2枚スライドがあります。今度はちょっと多めですね。じゃあ、ラストいきましょう。3ページ目の左下もやってみてください。

解説します。「全国学力学習状況調査」、ついつい私たちは結果に目が行きがちです。も



もちろん、結果を見ていただいて、その子どもの結果や誤答から分析して子どもの課題を見出し、改善策を考えていただくことはとても大事なことなんだけど、ちょっと見方を変えて問題や質問の文を読んでみてください。「こんなことが授業で大事です」、「こんな授業をやってよね」ということがいっぱい記されています。特に、中学校の英語の問題を見てください。コミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定がきちんと示されたリード文ばかりです。たとえ知識・技能を測る問題でも、すべてコミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定がなされています。そういうことを授業で設定してくださいということです。「結果も大事だけど、見方を考えると全国学調の利用の仕方が変わりますよ」ということです。質問紙からは、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のポイントだということが読み取れます。

皆さんはどこに印を打たれたのでしょうか。これは、私を感じた部分です。同じでなくてもそれぞれでよいのです。ただ、ここは今便宜上、ここでジャムボードとかあったら交流しながら、テキストマイニングでどれがヒットしたのだろうとやるところです。来年度やりたいね。ちょっと私の方で便宜上、キーワードを全文から抜いてみました。どうぞ、皆さんは皆さんで考えてね。それがお手元の3ページ、右下にあるんですよ。これを私はカテゴリー分けしてみました。

5つあります。1つ目のこのカテゴリーにはどんなことが書かれてるのでしょうか。どんなキーワード、1個タイトルを付けるとしたら、どんなカテゴリーにしますか。2つ目、3つ目、4つ目、5つ目はどんなキーワードにしますか。みんなで協議したいところですが、便宜上、私の方で提示してみます。友達や先生と、あるいはICT機器類を使って遠隔地の人と、あるいは教材・教科書と対話する。どうもこれは「協働的な学び」かなと思いました。一方、この2つは子どもが自分の心や頭の中で作業してることかと思いました。この4つ目は、自らとか、自分で、自分から、というキーワードに重なるから、ここらが主体的と思ったことでした。次にこの5つのカテゴリーが「協働的な学び」にどうつながるかと考えました。本やインターネット、図書館資料、自分に合った、あるいは一人一人に応じて、つまり「個に応じた指導」を支える手段だと読み取りました。

この「協働的な学び」と、「個に応じた指導」を行ったり来たりするわけです。青山先生の言葉を借りると、往還する。個に応じた指導でやったことが協働的な学びで生かされ、また協働的な学びで得たことを子どもが自分の個に応じて練り直してみる。この往還があってはじめて主体性が育っていくんだなと読み取ることができます。どうぞご自身でもう一度考えてみてください。そして、この5つ目は、全体を包含した言葉だなと読み取りました。「学習過程を見通した」が、ここにも出てくる。最初に指導要領でこういう構成じゃないかなと確認したよね。私は、全国学調の文言から読み取ったことでした。

主体的とか対話的とか、協働的とか個に応じた指導という言葉がどんどん先走りするけど、こういう国が出している資料にあたってみると一般化されるということです。その作業をするのが私たち担当の調査官、視学官であろうかとも思います。指導主事の仕事でもあるかもしれませんね。

じゃあ次です。お手元の資料の4ページに移ります。今話題になった「個に応じた指導」と「協働的な学び」という言葉が出てきました。これってみんな今までに聞いているしやってきました。「指導要領でわざわざ言われなくても前からやっている」とみんな思って

いるのよ。指導要領は、後追いしていると思って見ているよね。でもね、この2つの文言を並列に並べてみると、何かおかしくないですか。「学び」の主語は誰ですか。児童生徒でしょう。じゃあ「指導」の主語は誰ですか。先生よね。これが並列になってるのはおかしくないですか。だからこれらを学習者の視点の言葉に言い換えると、「個別最適な学び」と「協働的な学び」になるということです。

令和3年度に、この「協働的な学び」と「個別最適な学び」がセットで出てきました。みんな嫌だったよね。「文部科学省は、すぐ新しい言葉を出してくる」「働き方改革が言われて多忙な教師に、まだこれやれというのか」「ますます教師のなり手が減る」とみんな思ったのではないですか。しかし、何も新しいことを言ったわけではなく、言葉の整理をただけです。皆さんが今までやってきたこと、それをきちんと整理しました。そうしたら、またそこで「なんで今ごろ出すのか。もっと早くから出してよ」と思うのですが、そこらが行政です。

私たちは、その昔々、集合住宅に住んでいることがありました。集合住宅、〇〇荘って言われていたのがアパートになりました。アパートという言葉は、だんだん換わってきました。今は、アパートじゃなくてマンションになった。マンションって聞いて「ちょっとすごいんじゃないの」と思いましたよね。でも中身は変わってないんです、何も変わっていないけど、「アパートの呼び名をマンションにしよう」ってなる。今マンションという呼び名は、まずない、〇〇ハイツとかになっています。私の住んでいる建物は、オーキッドっていいです。オーキッドって屋根裏だけど、屋根裏ではなくて1階に住んでいます。庭も付いています。だけど、オーキッドって言うと、なんとなく「ちょっといい感じ」って思ってしまう。それが言葉のマジックです。その言葉のマジックに騙されないためにも、言葉の力を付けないといけないのです。さらに言葉のマジックも覚えないといけないと考えます。

文部科学省は確かに言葉の整理をしました。そして、この「個別最適な学び」の中には2種類あるということを改めてここで提示をしています。お手元の資料、4ページ目の右上、あるいはスライドを読んでみてください。読めましたか。「指導の個別化」と「学習の個性化」について、何かキーワードが拾えましたか。線を引いていらっしゃる方がいるけど、どんなところにキーワードを見つけましたか。

参加者「子ども一人一人に、というところ。」

どうして、そこを赤ペンで丸したんですか。

参加者「一番大事なところだと思ったからです。」

何が一番大事かという、パッとこれを見た時に「子ども一人一人」という言葉が両方に入っているということです。

学習指導要領の前文、総則にある前文、ご存じですか。行政は知っていないとね。校長先生もちろん知っていないとね。この度の学習指導要領には、総則に前文が入りました。ここに日本の教育の目的が記されています。「何のために」が記されている。学習指導要

領に記されていることは、目標と内容でしょう。でも、指導法については記されないんですよ。なぜでしょう。記したらどうなりますか。35人学級だろうが10人学級だろうが、みんな同じになってしまいます。子どもの実態に合わせて、そこは先生が工夫してくださいよ。これが指導力ですよ。だからそこまで規定はしてないわけです。指導要領は、目標と内容と、そして前文に目的が記されている。その目的の中に、「誰一人取りこぼさずに」と書いてある。「誰一人残さずに」、岩切先生のご発表の中で、その言葉が何度も出てきたことに気付かれましたか。

学級の子どもを教師一人で見取るのは大変です。Cの子どもを「次には絶対Cにしない」と思って、私たち教師は授業をしている。誰も取りこぼしたいなんて思っていない。けど様々な子どもが35人いて、こぼしてきたことがなかったかと聞かれると、私なんかはもう、ごめんなさい。自分一人だけでは、なかなかうまくいかない。その一人一人の子どもたちをこぼさないために、一人一台端末の活用があるということ、このたび文部科学省が言っているんです。「個に応じた指導・協働的な学び」を「個別最適な学び・協働的な学び」と揃えたところで、この「GIGA スクール構想」のもとでの一人一台端末の活用をしながらこの指導の個別化と学習の個別化をより効果的にやってくださいということ、指導要領をもとに国が打ち出しているということです。それがこのポンチ絵に記されている。ここに「個別最適な学び」「協働的な学び」があり、それが一体的に充実されることで主体的・対話的で深い学びにつながるというポンチ絵になります。その際に、一人一台端末、ICTの活用、これを効果的に使うことで「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図れるということです。『不易と流行』という言葉があります。教育は、どんなに時代が変わっても、状況が変わっても、変わってはならないものがあります。教育の理念です。この教育の理念、変わってはいけないものを実現するためには、その時々々の状況によったものを上手に取り入れていかないと、理念というのは実現できない。“不易と流行”というのはそういう意味です。

さて、指導要領や文科省の資料とお二人の実践を結び付けたところですが、それでも具体がわからないとじっくりきませんよね。今日ご発表された岩切先生を題材に今からみんなで彼の授業の分析をします。岩切先生は、ご存じのとおり『文部科学省 mextchannel』に動画をあげていただいている先生です。この時は、まだ外国語科ではなく、外国語活動としてやっている時でした。2019年、移行期間中のものですね。移行期間中だから、5年であれ6年であれ外国語活動として実施していたし、移行期間中は教科書がないから、国が作った“*We Can!*”という教材を使ってやっていました。この単元について、1本の授業を2種類に分けているので、ぜひご覧いただきたいと思います。単元の目標をご自身で読んでいただいてよいですか。これね、外国語活動の移行期ですが、当然、外国語科を意識して、外国語科に向けての指導をしていただいているという具合にご理解くださいね。どんなふうに授業をされたのかというのを、今からお話します。岩切先生の授業を実際に拝見しています。その授業を撮りに行っているんですね。これは1月の授業だったよね。ジェイク先生というALTの先生と岩切先生が、まず最初に“*What did you do during the winter vacation?*”冬休みに、何をしたのというスモールトークから入るんです。するとジェイク先生が“*I'm from Australia. In winter vacation, my mother came to Japan from Australia. So, I and my mother went to Udo shrine. This is Udo shrine.*”という具合に、冬休みのお話を英語

でしてくれるわけです。

これは、7時間ある単元の1時間目です。6年生の1月なので、もう既に子どもたちはその前の年、9月には夏休みの出来事をお友達とやり取りする活動を経験しているから“went to”とか“I ate *shabu-shabu*. It was delicious.”なんていう過去形に触れてはいる。触れてはいるが、定着するほどきちんとまだ身に付いていない状況ではあります。“I enjoyed throwing lucky stones.”神社で何かお皿、石を投げるんですね。それを楽しんだから“I enjoyed throwing lucky stones.”という話もしてくれたので、岩切先生は、子どもたちが前の年に触れた went, enjoyed, ate, saw という過去形のヒントカードを添えていきました。そして、岩切先生も“I went to the shrine.”と言いました。そして“I saw many people.”というスピーチをしました。その後です。子どもたちに“OK, let’s talk about your winter vacation.”と言って、練習なしでいきなりやり取りをさせます。どうしてですか。岩切先生ご本人に聞いてみよう。どうして練習させてからやってあげないのですか。

岩切「自分が言えないとか、できないということをメタ認知させるためです。」

岩切先生の資料を見てください。資料の中に、そのことが記されていたはずですが、メタ認知が必要だということが記されていた箇所がありましたよ。何ページにそれが記されてありましたか。14ページの上の方に図があって、その左側に「メタ認知」と書いてありますね。いきなり子どもたちにやり取りをさせます。一応黒板には went や ate はあるものの、子どもたちは忘れていて「あら、言えない」という思いを強くします。つまり、前半にお話をした自分の立ち位置をここで理解するわけです。子どもたちはスモールトークをしました。まさに協働的な学びをやりながら、自分で自分の立ち位置を理解するということをやっているわけです。じゃあ岩切先生とジェイク先生はほんやりしてたかというところ、ここで個別指導、個に応じた指導に回ります。助けが必要な子どものところへ回っていくわけです。皆さんもやっていることです。わざわざ個別・最適とか言われなくてもやっているんです。だから自信をもってください。その後、岩切先生は子どもたちに「言いたかったけど、言えないで困ったことは何だった」と聞くと、この男の子が「いとこって何て言うの」と日本語で聞きます。すると岩切先生はどうしたでしょう。

岩切「“*Itoko in English, please.*” と、英語で質問するように言い換えました。」

英語でジェイク先生に聞いてごらんとするわけです。すると、この男の子は“*Itoko in English, please.*”とジェイク先生に言うと、ジェイク先生は“*Itoko?*”とわからない振りをします。わかっているけど芸人やね。“*Itoko?*”なんてしらじらしいことを言う。そうしたら、岩切先生はどうしましたか。

岩切「いとこはどう言えばいいか、知っている英語を使ってみんなで考えてみなさいと、子どもに返しました。」

「いとこってどうやって説明したらよいですか」と子どもに返すわけです。すると、こ



の子がどうしたかという、彼の様子でわかるとおり“my father sister..., my father (‘sが入ったかどうか、ちょっとあやしいですが) sister child”と言うわけです。そうしたら、それを見たジェイク先生が同じことを“Ah, my father’s sister’s child. Ah *Itoko*, I see. Cousin.”と教える。そこで子どもたちはcousinという言葉を得るわけです。いところを言うために“my father sister child”とやっているよりも、“cousin”を言う方が有効だなということは誰が聞いても思うことです。しかし、子どもは必然性がある言葉で自分のものにします。いかに必然性を作るかが教師の腕の見せどころです。

私には、娘が二人います。中学校の教師をしていた時に、第1子を出産します。非常に言語に興味があったので、育休の間、長女のしゃべる言葉を全部ノートに付けました。ノートが2冊あります。まず何からしゃべるんだらうと、とても興味があった。そうすると、うちの上の子が最初に言った台詞は「いや」が最初でした。その次に「ミー」と言いました。指をこうやって、震えながら「ミー!」、これは「めっ!」ということです。私がいかに叱っていたかということですね。そういったことを克明に記録するわけです。それをずっと続けて、子どもたちがもっと大きくなって、もう一度自分が中学校に戻る時に、子どもの言葉の習得ってどうなんだらうと娘の記録を見ながら振り返りました。ああ、子どもの言葉って、まず感情・要求、要求から入るんだなと知りました。快・不快、そして要求から入っていくということ、記録を辿りながら思ったわけです。

やがて、2歳ぐらいになると何が始まるかということ、娘は犬を見たら「ワンワン」、猫を見たら「ニャーン」と事実を言い出すようになった。言葉の習得って面白いなと思った。当たり前なこと、生きていくためには、まず快・不快を言って、要求していかないと生きていけないのです。生まれてすぐに「ワンワン、ニャーニャー」と言っても、何の得があるのかということです。「やあ、お母さん、今日はいい天気ですね」と言っても何にもなりません。おむつが濡れて気持ち悪いというのを、「ギャー」と言ってやるわけでしょう。おなか減ってもマンマって言えないから「ギャー」と泣くわけでしょう。抱っこしてほしいから「ギャー」と泣く。すべて要求を訴えるために泣き出すわけです。それがやがて、いくら抱っこをしても泣く場合が出てきます。子どもも学ぶわけです。「抱っこじゃなくておなか減ってる」と子どもは思うわけです。だから、これは多分そうかと思うのだけど「ああ、きちんとお腹が減ってますって言わないと、食べ物をもらえないな」と学ぶから、「マンマ」と言い出す。面白いですね。それでずっと子どもの言葉を追っていったわけです。子どもが言葉を学ぶには必然性が要る。それともう1つは、言葉の獲得には感情を伴うということ、我が子を育てながらとても強く思ったことでした。「おいしい」という言葉は、やっぱり美味しいものを食べて身に付くんですよ。ちょっと余談ですが、“Where do you want to go?”という外国へ行く単元がありますね。いつも不思議に思うのですが、食べたこともない外国の食べ物を見て“It’s delicious.”と子どもが言う。その授業を見た時、「食べたことあるの?」「ない」、「なんでおいしいってわかるの?」「書いてあった」、「あっそう」、そうしたらせめて“It looks delicious.”を教えた方がよいかなと思った。“It’s delicious”は、食べてからという表現だというのが私の主義です。ちょっと余談ですけどね。

その次です。岩切先生は、とてもよい会話をしているペアを見つけます。そのペアに会話を再現してもらおうと、片方の子が“I played soccer. I enjoyed soccer.”と言って会話がぶつんと止まってしまいました。この子が何も言わなかったので、もう一人の子が“Do you

like soccer?” と会話を続けたところをきちんと岩切先生は見取っていたのです。この子たちは、うまいこと再現してくれました。そこで、質問することって大事よねということが、ここで押さえられるわけです。「さあ、もう一回やってみよう」と、2回目のスモールトークに入るということをやっていました。その後、ジェイク先生がご自身の小学校の時代の写真を見せながら、小学校の思い出についてお話をしてくれます。ここで初めて、今日お勉強するのは小学校の“My best memory” だよということを黒板に書いて見せるわけです。そして子どもたちに「小学校6年間でいろいろな行事があったよね。どんな行事があったかな。英語で何て言うか考えてみよう」とグループに振るわけです。教えません。なぜ教えなかったの。

岩切「言えないということを自覚させるためです。」

言えないということ、でも言えるものもあるということも自覚をさせたかった。自分たちで言葉を紡ぎ出すということもさせたかったわけです。子どもたちは、すぐにジェイク先生を呼びました。「ジェイク先生、運動会」と言ってこの男の子がジェスチャーをすると、ジェイク先生が“Ah, sports day.” と教えています。子どもは苦労して身に付けたこと、苦労して得た情報は身に付けていきます。その後、岩切先生は「はい、じゃあカードを出しなさい。その行事の絵カードで、言えるものは右、言えないものは左へ置きなさい」ともう一度メタ認知をさせる。個別の作業をさせて、先ほどグループで練習してわかったことも活かしながら、もう一度自分で自分の立ち位置を明確にさせるわけです。その後、早くできた子どもに「教えに行きなさい」と言います。早くできた子どもは周りを助けに行く、つまり小さい先生がいる。学級経営の賜物ですよ。その後、はじめて岩切先生は、さっき子どもが持っていた絵カードの大型版を出して、練習をします。“Repeat after Jake sensei.” この時、どんな作業が頭の中で動いていると思いますか。graduation ceremony がわからなかった子どもは、「何て言うのだろう」と思って必死で聞きますよ。「さっき sports day は言えたけど graduation ceremony は言えなかった」それで graduation ceremony の時は緊張して聞きます。今ゲットしないと次に困るからです。

私はね、“Repeat after me.” がまずいなんて思っていません。必要です。ただ、どんな場面で“Repeat after me.” をさせるのかということが大事です。必然性を感じさせて“Repeat after me.” をやらないと意味を成さない。皆さんも中学校でこうやってフラッシュカードを見ながらやってきたでしょう。“OK, today’s new word. Everyone, repeat after me, ...” 誰も困ってもいないのに、教師のアリバイ作りでやるんです。「何回もリピートさせて教えているのにできない」となる。必然性がないのにね。それに対して岩切先生の子どもたちは、必死でわからない言葉をゲットしようと動いていくわけです。私は、これはみんなとやっているけど個別の指導だと取っています。その後、テキストに載っている「Let’s Listen」の部分で、3人の登場人物の小学校の思い出のお話を聞くわけです。ここはみんなぼんやり聞いてたら駄目なところですよ。いいですか。あとで重大な質問をしますよ。

子どもたちはテキストに回答を書いて、みんなで「何て言っていたか」と確認をします。そして最後に、子どもたちに「My best memory についてしゃべってごらん」とペアワークをするんです。練習させたのは、行事だけですよ。他はさせていません。だけど、語る、

語る。この子なんかピアノのこと言っていますね。“I enjoyed the piano.”と、間違った英語もいっぱい有りじゃべる。

実はこの後に、初めて岩切先生は単元の目標を子どもに言うわけです。子どもに「何するんだっけ？」と言うと、子どもは「ジェイク先生にベストメモリーを伝えよう！」と言います。そうしたら、ジェイク先生が“No, no, no. Wait, wait, wait.”と言うわけです。さらに“I have friends. They are ALTs in Miyazaki city. This is Mary sensei. so, Let’s watch her message.” そうしたら画面に現れた彼女が“Hello, I am Mary. I am an ALT in Aoshima elementary school. What’s your best memory?”と尋ねるんです。動画を見せる前に、ジェイク先生が、このメアリー先生は“My Aoshima elementary school is the No.1 in Miyazaki city.”と言う。“My students in Aoshima elementary school have the best memories, wonderful memories. Aoshima elementary school is the No.1 in Miyazaki city.”それで彼女が「あなたたちのベストメモリーも教えてね」と言うわけです。

“This is Lucas sensei. His school is Eihira elementary school. He said, “Eihira elementary school is the No.1 in Miyazaki city. My students have best memories. So my school is the No.1. Please tell me about you best memory.”とメッセージを言うのです。

で、ジェイク先生が聞く。“Aoshima elementary school is the No.1?”子どもが“No.”“Eihira elementary school is the No.1?”“No.”“Akae elementary school is the No.1?”と聞くと、子どもが“Yes!”と言う。ものすごく嬉しそうな顔をして言うわけです。“Please help me. Please tell them Akae elementary school is the No.1 in Miyazaki city. Please tell them about you wonderful best memories.”と言うわけです。子どもたちは、「よし、ジェイク先生のために、ルーカス先生とメアリー先生に僕らのベストメモリーをしゃべったろう！」と、意欲が上がったのがこの1時間。とても素晴らしい授業でした。子どもたちは意欲を燃やして、授業を終わります。

今日、彼は発表の中で「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定がとても大事なんだ」ということをおっしゃったし、資料にも書いています。これが7時間目の1時間目でした。私が拝見したのはこの授業のみで、2時間目から7時間目までの授業は残念ながら見ていません。しかし、結末が見たいのが私です。そこで、宮崎市教育センターの指導主事に、2時間目以降の授業のビデオを撮って送っていただくようお願いしました。7時間目の授業のビデオを見てひっくり返った。私は岩切先生に「これはベストメモリーになったらへんやん。これでルーカス先生とメアリー先生が、Akae elementary school が No.1 って言うんか！」と言った。なんでそんなことになってしまったのか、ご本人に言ってもらいます。

岩切「学習の過程で子どもたちに“No.1 と思ってもらうために”という目的意識を、思い出させることがなかった。そこを突き詰めさせる手立てがなかったということです。」

1時間目で、とても素敵なコミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定をしたものの、2時間目以降からそのことを都度・都度言わなかったから子どもたちの気持ちに入っていかなかった。だから子どもたちの Best memory は、“I went to Kagoshima. I saw

many foreigners.”とか平気で言う。えっ、それがなんで赤江小学校がNo.1になるのという内容のスピーチが連発だった。

そこから岩切先生は毎時間、毎時間、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定だけを僕は言っています」というぐらい必然性を大事にした。今、みんなコミュニケーションを行う目的や場面・状況などの設定にきっと頭がいていると思いますが、そこじゃない。

ここで少し皆さんにお尋ねします。彼の授業は、一人一台端末が入っていない全面実施の前でした。つまりコロナ禍の前ですから、まったくGIGAスクール構想の話がなく、一人一台端末は動いてないんです。もし、この授業をGIGAスクール構想の下で一人一台端末を活用するとしたら、デジタル教科書を活用してこの授業をやるとしたら、どこで活用できそうですか。ボーっと聞いていたらわからない。一人一台端末が使えるような場面、デジタル教科書が使えるような場面、学習者用デジタル教科書が使えるような場面は見つかりましたか。お隣の方、前後の方と相談してください、どうぞ。オンラインの方、ご相談する方がないと思うけど、ちょっと自分でメモしてみてください。先生ならどこで使えるそうですか。

参加者「まったく外すかもしれませんが、相手のALTの方の動画を見るようにするかな。」

直山「相手のALTというと...。」

参加者「お二人の方の。」

直山「相手のというのは向こうのですか。」

参加者「それをもう一回聞いたりするかな、と。」

なるほど、子どもが個人でね。1回で聞き取れているかどうかわからないから、子どもに「もういっぺん見てみようか」とやってみる。ありがとうございます。

他で使えるところありますか。今日は、主体的にということを学んでいますからね。

参加者「カードを使うかわりに、タブレット上で言えるか言えないかというのを分けていきます。その後自分がわからない言葉をデジタル教科書とか、学習支援ソフトを使ってALTが吹き込んでおいてくれた音声で、何回も聞けると思います。」

おっしゃるとおりですね。もちろんALTが言ってくれるというよさもあるけれども、それでも岩切先生が「1人も取り残さない」ということを考え、あの時間の中で誰もがあの行事を言えるようにしてやりたい。Cの子どもをつくりたくないんだというんだったら、あそこで学習者用デジタル教科書を子どもが自分で駆使して使うことは大いにありますよ。他にないですか。

参加者「Let's Listenのところも、自分で聞いて答えができたらいいなと思います。」

私もそう思いました。「Let's Listen」のところは1回聞かせました。それもありません、まず個人で聞かせてみて、どんなことが聞こえたかを拾い集めて「本当にそんなこと聞こ



えたの。じゃあもういっぺん聞いてみよう」,あるいは「全体で確認しよう」というのもありよね。「Let's Listen」の場面では,学習者用デジタル教科書と教師のデジタル教科書を活用することができますね。他にアイデアはありますか。じゃあご本人に聞いてみましょう。今3点出てきたけど,他にも何かアイデアがありますか。

岩切「ほぼ同じなんですけど,最初の思い出を言う場面で,前に夏休みの発表を自分で記録していたら,そこを聞き返して何と言っていたかというところから思い出して,今回の冬休みの自分の思い出につなげることができたかな,とは感じています。」

まずはちょっとやらせてみた後,「去年の夏のビデオを見てみよう」と言ってその時の録画を見せる。そしてこの単元の終わりにルーカス先生とメアリー先生に発表する動画も撮っておく。「自分はどうか変わったかな」と比べさせると,去年の9月と今年の1月,この3ヶ月間の自分の成長が見られる。目に見えるポートフォリオを映像で置いておくことが可能ですね。

もうひとつね,ちょっとあえてみんなに言ったんだけど,岩切先生が代表の男の子のところで,なかなかよいなという子どもをここで紹介した話をしたよね。私はここで言葉を添えたんだけど,「この子らは再現ができたよね」と言った。小学校で授業を見ていると,とてもよい場面をよく見つけるんです。特に3,4年の外国語活動では,ジェスチャーも付けてやってくれているんです。それで「よかったから,もう一回やって」と言うと全然アウトです。がっかりすることがあるから,「さっきはちゃんとこんなにやってたんよ」と添えないと駄目です。記録として動画を撮っていると「ちょっと見てみようか」と再現ができます。こうやることで言語活動が充実してくる。効率的に,効果的に言語活動の展開ができるということです。くれぐれもICT機器の活用が先ではなくて,言語活動の充実,言語活動を通した指導の充実,効率的・効果的に行うためのICT機器の活用という具合に理解してください。

さて,青山先生が「選択」という言葉をよく使っていました。必ずしも子どもが学習者用デジタル教科書を選ばなくてもよい。子どもが1枚ずつカードを使ってやってたけど,やらなくてもよいんです。紙の教科書のワードリストを見てやってもよい。教科書の9月にやっていたところを,振り返ってみてもよいんです。「ICTを文房具のように使う」筆箱の中には定規もあれば,赤鉛筆もあれば,鉛筆もあればシャーペンもあれば,消しゴムもあります。子どもが自分の状況に応じて,どれが必要かを選ぶ力が欲しいんです。そこを「はい,じゃあ学習者用デジタル教科書を見てやって」と言うと,選んでいることにはならない。ある意味それは一斉指導です。個別最適な学びの中で,学び方さえ子どもが自分で選ぶ。自分の立ち位置に合う学び方を子どもが選ぶ。そこがまた思考なんです。それを,ぜひ心掛けてほしいと思っています。

学習指導要領の趣旨の実現のために,こうやってGIGAスクール構想の下での一人一台端末の活用で,時と場を超えることができる。こういうものを使って趣旨の実現をしていただきたいと思います。ご存じの通り,「令和日本型学校教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方」の答申を文部科学省がお話し合いをいただいた資料として挙げています。お手元の5ページになります。2枚分ありますが,その2枚目を拡大します。お手元の資料,

5 ページの右下，赤で囲んだところ，「教師に求められる資質・能力の再整理」と書いてある。五つ記されています。この辺は当たり前の今までのこと，そこに「ICT や情報，教育データの利活用」ということが入っている。この力を教師が付けることを，令和日本型教育ではもう入っているよということです。こうした力を付けるためには，使わない限り付かないということです。これは，言葉の学習と同じです。使わない限り使えるようにはならない。はじめは時間が掛かるけど，まずはやってみようということです。

では時間が来たのでここでお話を閉じます。長時間に渡りありがとうございました。お疲れさまでした。